2014 年 9 月 14 日

ファイナルメディアカンファレンス

JRC

出　席　者

勝田　範彦・足立　さやか	**（ラックスポーツ）**
奴田原　文雄・佐藤　忠宜	**（ADVAN PIAA ラリーチーム）**
新井　敏弘・竹下紀子	**（SUBARU チーム アライ）**
柳澤　宏至・中原　祥雅	**（クスコレーシング）**

司会：共同記者会見を始めたいと思います。JRCA メディア部会に所属しております伊吹と申します。まずは、JN６クラス優勝クルー、奴田原選手、佐藤選手にお越しいただきました。優勝おめでとうございます。

奴田原：ありがとうございます。

司会：非常に大一番、このラリーどっちが獲るかで、今後のタイトルの流れが大きく変わる戦いだと思うんですけど、その中で、特にデイ１先行して、追いつかれ、いろいろあったと思うんですが、リザルト上では奴田原選手が一番得意とするデイ１でマージンを築き上げ、デイ２は自分のペースで行くという手堅いラリー展開だったんですけれども、実際のところは今回の戦い、どうだったんでしょう？

奴田原：えぇと、そうですね。出だしは良かったんですけど、僕の方が。前半の３本目、４本目くらいから勝田君がプッシュしてきて、すごくいいタイムで走ってきたので、また、サービス終わりぐらいで同点になったんだっけ？

司会：５が終わった時点で同点になりました。

奴田原：そうですね。同点に戻って、また降り出しに戻って、また頑張らなきゃならないなと思った矢先にちょっと、リヤタイヤがスローパンクチャーしてまして、ちょっと何にぶつけたかわからないんですけど、何か引っ掛かったんだろうけれど、40 秒くらいロスしまして、それを取り戻して、あとまた２日目頑張らなきゃならないなと思って、次のステージ気合いを入れて走っていたら、勝田選手が今度はトラブって止まってて。それで決着がついちゃったんですけれ

ども。そこまで勝田選手、かなり速かったので、今回大変だなと思ってましたが、去年僕、最後の最後にパンクで終わってしまったので、まあお互い様で。どっちにもラリーには罠があるんだなと改めて思いましたね。

司会：佐藤選手に伺います。40 秒ビハインドを背負った時点というのは、一番コドライバーが勝負の展開を組み立てないといけないところだと思うんですけれども、実際にどういう心境でした？

佐藤：まあ普通に走って届く、勝田君との差っていうか、いつももう接戦になるので、40 秒っていうのはかなり難しいというか、無理なタイム差だったと思います。で、奴田原には、こちらに起きたことは向こうに起きるかもしれないから、諦めずに走るんだ、諦めずに走れということで走りました。で、かなり気合い入れて走ったんですけれども、走ってる最中に、なんか勝田、「ふん？」のが見えて、本当かなと思ったけど、僕らの前にいて、あのカラーリングをしているのは、勝田君しかいないので、あぁ勝田だな、勝田君だなというのがわかりました。そこから先は、奴田原選手は確実にペースダウンしました。乗ってて、わかるくらい落としました。で、その前に「ねぇ、今の勝田だったよね？」と聞いてきました。で、「そうだよ」と言ってあげました。

司会：これでタイトルに向けて王手をかけたことになりますが、今回のラリー北海道で勝った勝因と言いますか、喜びの言葉と次のラリーに向けての一言を奴田原選手から一言ずついただきたいと思います。

奴田原：シリーズポイント的にはかなり有利になったので。ただ、まだまだラリーはホントに何があるかわからないので、最後まで手を抜かずに、次のラリー、またその次、あと２戦残っていますので、きっちり走っていきたいなと思ってます。

佐藤：最後の札内は１本しかなくて良かったなと思っています。

司会：そこに尽きますね。次戦頑張ってください。ありがとうございました。続きまして JN5 クラス、鎌田卓麻選手にお聞きしたいと思います。市野選手が、飛行機の時間があるものですから、先に帰りました。まずは、優勝おめでとうございます。

鎌田：ありがとうございます。

司会：特に FR でこの長丁場のラリーを戦う上で、今回終わってみれば、卓麻選手のぶっちぎりという優勝なんですけれども、特にペース配分と言いますか、どういうラリーの組み立てでいたかということをお聞きしたいと思います。

鎌田：ラリーが始まる前のレッキで自分の得意なところとか、車が壊れにくい林道みたいなものを決めて、そこだけは全開で行こうって決めてたんですね。で、そこを走ってみて、ライバルよりも僕の方が速かったので、すごく心にも余裕ができて、車をいたわって走れました。

司会：じゃあ、そこはライバルが速くても当たり前と。BRZ にとって得意な林道というのは、どういう林道なんですか？

鎌田：FR なので、上り下りがきついところとか、ヘアピンが多いシチュエーションだとちょっと厳しいけれども、北海道みたいな広くてハイスピードな所は、JN6 クラスの何台かも食えるくらい速いので。そういう所が得意ですね。

（携帯電話の呼び出し音。鎌田、慌ててポケットを探る）

司会：あっ、電話ですね。出ますか？

鎌田：いえ、出ません。

（一同笑い）

司会：鎌田選手、これでタイトル決まりました。実は鎌田選手のタイトルは、北海道の地方選手権以来だと思うんですが、20 年くらい前の話ですかね。

鎌田：もう、そうですね、それぐらいですね。

司会：全日本初タイトルということに、驚きを感じているんですけれども。正直な今の感想どうでしょう？

鎌田：なんですかね。嬉しいんですけど、実感がないというか。元々、ランサー、インプレッサー

で、本当にもう身を削る思いでタイムを削ってきたラリーをずうっと何十年もやってきて、今ポッと BRZ に乗って、それほど頑張らない方がいいラリーをやっているので、すごく気持ちが難しいですね。速く走ろうと思って、ラリードライバーをやっていたんですが、速く走ったら壊れちゃうクラスもあるんだなというのが、すごくジレンマで。だから、去年なんか、ここスピード出してたんですけど、壊して、リタイヤしてしまったので。今年のシーズン初めに、3位、3位、リタイヤって成績で来たので、そこでちょっとチームと話し合って、今年は大人になって、チャンピオンを獲るという目標だけに向かって頑張ろうということで、話し合って決めたので、チャンピオン獲って嬉しいのは嬉しいですが、心の底から喜べるかというと、そうでもない、今は感じですかね。

司会：まだ実感が沸かないというところで？

鎌田：そうですね。

司会：今、看板が届きました。続きまして、JN3 クラス優勝、タイトルも決めました天野選手、井上選手にお聞きしたいと思います。天野選手、このラリー北海道、長丁場のラリーで、いわゆる嫌な天野選手。

天野：はっ？

司会：2 位、3 位とは競争しない。

天野：あぁ、嫌な奴ですからね、僕は。

司会：総合順位の方で突っ走るという。正直言うと久々の展開だったと思うんですけれども。競る、競争するラリーから、一人、卓麻君と同じで一人行っちゃうラリー、今回ラリー北海道でそれが出来たのはどこら辺なんでしょう？

天野：さっきもちょろっと話があったと思うんですけれども、頑張ると壊れるというのがまさに我々のクラスだと思います。全員がそういう風な車ですので、全員が踏むところ、抑えるところを考えながらラリーをやっているんですけど、今回はヤムワッカとかクンネイワがレッキの時よりも道も綺麗になっていたし、スピードを出していてもそんなに車痛みそうになかったんですよね。

司会：道が綺麗だった。

天野：そう、道が綺麗だった。本当に今回のラリー北海道、本当主催者努力が行き届いている感じがして、本当に道が綺麗になっていて、今までとバンパーの痛み方が本当に違うんですよ。ジャンプはね、まあ飛び方よっては、バンパー痛めますけど。そうすると、そういったハイスピードなところで、去年までだったらいたわっていたところをもっと全開で行けると思うので、そういったところのペース配分というのが、他の人よりも僕の方がうまかったのかなという感じはしますね。

司会：井上選手もそのあたり、例えばペースノートを読んでるあたり、作るあたり、気付かれてました？

井上：そうですね。道は確かに。10 年前にもたぶん同じようなエリア走ってるんですけど、その頃に比べると、穴とか、そういったコーション表記少なくなったかなと思ってます。あと今回特に気をつけなきゃいけなかったのは、ストレートが何百メートルもある先を、いつのタイミングで次の情報を伝えるか、っていうのがすごく難しくて。結構、ドライバーに「次」「次」ってせっつかれました。

司会：そこら辺はうまくいったと？

井上：はい、無事走り切りました。

司会：これで天野選手は王座奪還というか返り咲き、井上選手は 5 年連続チャンピオン決まったと思います。次戦からヴィッツターボになりますが、JN5 クラスの戦いになると思いますが、隣に鎌田選手もいるんですけれども、そこら辺の抱負をお聞きしたいと思います。

天野：憧れの鎌田卓麻選手と同じ土俵で戦えるだけで幸せでございます。

司会：鎌田選手、何か返す言葉はないですか？　（鎌田、首を振りながら頭を下げる）とんでもございませんと？　ありがとうございます。最後に、JN1 クラス、中西選手と美野選手にお聞きしたいと思います。JN1 クラスはシーズン通して難しい戦いだったと思うんですよ。舗装とグラベルで全くメンバー違ったり、特に今回タイトルを争うことになったのは、RX8 の最終的に

は中村選手との、要するにあまり直接対決のない中でのどれだけお互いポイントを取り合うかという対決。その中で今回、中西さんの弟子と言っていいんでしょうけど、高篠選手との攻防戦もあったりという、なかなか難しい戦いだったと思うんですけど、その辺りをどう戦ったのかをもう一度お聞きしたいと思います。

中西：最終的に身内２台、くまモン２台の対決になったんですけど、なかなかゆっくり走って勝たせてもらえない弟子でして。かなり最初から気合い入れて走りました。ここ札内リバーで１本目、高篠君に５秒くらい勝ってですね、それから土曜日も１巡目はかなり順調に走れたので、そこが一番良かったかなと思います。今日は実は途中まで高篠君に負けてでですね、ディポイントもちょっと危なかったんですけど、まだコドラの方がチャンピオン決まってないので、できれば２日ともディ（ポイント）を獲って、１位でゴールしたかったので、最後頑張ってなんとか２日とも１位で走りきれたというのが非常に良かったと思います。

司会：今お話に出ました現役女子大生コドラ、美野選手。まだ美野選手はタイトル決まっていません。残り２戦、どのように戦っていきますか？

美野：まず何より完走することを目標にして、あとは１つでもいい順位で上がれるように走ってもらえればいいなと思っています。とりあえず完走しないといけないので、危険な所は読み落とさない、気をつけさせるということを徹底していきたいなと思います。

司会：「お父さん頑張って」って感じですね？

美野：はい、お父さん頑張ってください。

司会：ありがとうございます。メディアの方、何か質問ある方、いらっしゃいますか？　いいですか？　僕、奴田原選手に最後に聞いていいですか？　レグ１、最終サービスで奴田原選手、勝田選手のところに陣中見舞いに行ったように見えました。僕、全日本ラリーの中で初めて見たシーンでした。

奴田原：そうですか？

司会：レーシングスーツのまま。あの時の心境と言いますか。

奴田原：いや、何ですかね。単純に何があったのか知りたかっただけですけどね。

司会：興味本位で行ったんですね？　「頑張れよ」って意味じゃなく？

奴田原：いやまあ「頑張れよ」というのはありますけどね。いや、ただ、来られると嫌なのかなというのもあるけれども、でも、勝田選手とは今年に限らず、長いことお互いに争ってきてまして。やっぱりその、ライバルがいることで、自分もどんどん速くなってますし。そういう意味では、失敗した時のガックリした気持ちもよくわかるし。だから、まあなんすかね、なんでしょう、わかないんですけどね。

司会：なんとなくわかります。

奴田原：いや、まあ直接行くことはあんまりないですかね。

司会：まあ行かずにはいられないという気持ちだったというか？

奴田原：はい、まあそうですね。あれで決着着いたので。

司会：特にデイ２なんかはいい戦いになったと思うんですけど。

奴田原：デイ２の今日の何本目だ、足寄ロング？　足寄ロングの勝田君のタイムはすごい速いです、それはもう。あれはもう今日勝負じゃなくて良かったなと思いましたね。すごくガスが、霧がかかってて、雨が降ってたんですよね、足寄ロングが。路面もすごく滑るコンディションで、あの中であのタイム、Ｓ2000 の何秒しか変わらないです、確か。だと思うったです。ちょっと正確には見ていないんですけど。タイムはすごいタイムだなと思いましたね。そういうライバルがいるので、自分も負けないようにまだまだ速く走れるんだなと常に思ってやっているので、すごくいい刺激になっています。

司会：ありがとうございました。以上で共同記者会見を終わりたいと思います。各クラス優勝クルーの皆さん、それからチャンピオンを獲得した皆さん、おめでとうございます。ありがとうございました。